

# カズの書道講座 (一)

はじめに

拙宅隣の児童文学者でした、故佐藤真佐美先生の書齋名を「ボヘミアン」と言い、暮辺見庵と漢字を当てています。「自由奔放な生活をする人が、夕暮れ時に見える庵、そこへ帰ろう」という意味合いの書齋名です。先生は正にそんな感じの人でした。

ここ暮辺見庵では、時折り「暮辺見庵文化サロン」と称して、友人知人の方々に声を掛けて集う、交流の場が持たれています。

初めは七八人がアイヌ出身の牧師から聖書を学ぶ「聖書の会」でした。佐藤家の居間で拝聴し、終わってから「清酒の会」となり、一杯飲みながらというスタートでしたが、いつしか人数も増え、居間から書齋に移り、聖書・清酒の会も「暮辺見庵文化サロン」となり、最初に何か催し物が行われ、その後に一杯飲んで交流するといふ集いとなりました。催し物は琵琶、詩の朗読、南京玉すだれ、お囃子、ジャズ、軽音楽、フラダンス、落語などと様々です。

過日十月六日の土曜

日夜七時から、その催し物として「書道講座」を担当させて頂きました。前半に話を十五分程度、後に実技を四十分程度したのですが、ちようど良い機会かと思えますので、その講座を基に『カズの書道講座』を開設いたします。



## 書道とは

単純に言えば「筆に墨をつけて紙に文字を書くこと」です。一般的に目に見えるものを書きますと絵となりますが、文字を書くというところに書道の特徴があります。また、文字とは「言葉を書き写す機能を持つているもの」ですから、写されたものから言葉にならなければ、文字とは言えません。ですから、文字でないものを書いたら書道とは言えないのは、と思っっているのですが、文字に拘ると疑問も生じてきます。

### 疑問①

現在、非文字性を提唱する前衛書道というものがあります。これは書道と言ってよいのか。

### 疑問②

先に開催された「青山杉雨の眼と書」展（東京国立博物館・平成二十四年七月十八日から九月九日）に出品されていた、青山杉雨書の「戦士図・図象文字集成」という作品。図象文字というものは、文字とは言えども言葉になりませんので、文字の定義には適っていません。これは書作品でよいのか。

## 漢字を書く

古来より日本で使用している文字は、漢字と仮名です。仮名には、ひらがなとカタカナとありますが、中国から漢字が伝来し、日本人はその漢字から仮名を発明しました。書道も中国から伝わって来ましたが、やはり漢字を書くことが、書道の基本であり伝統であると思っっています。

その漢字には大きな特徴が二つありますから、しっかり認識しておきましょう。



戦士図・図象文字集成 1981年作

## 特徴(一)

漢字は、一字一字にそれぞれ意味があるということです。これを表意文字あるいは表語文字と言います。意味を持つ文字は、世界中で漢字だけと言われます。因みに、仮名やアルファベットなど、意味を持たない文字は表音文字と言いますが、なぜ漢字は意味を持つのでしょうか。

それは漢字には、どのように作られたかという「成り立ち」があるからです。これを「造字法」といいます。あるいは「成字法」と言い、象形・指事・会意・形声・転注・仮借文字の六つに分けて解説されます。この六種の文字を「六書」と言います。

六書を簡単に説明しますと、以下のようになります。

〔象形〕山・月などのように、何かの形から出来たもの。

〔指事〕一・二・三や上下のように、事柄や数など絵で表せないものを形にしたもの。

〔会意〕日十月で明のように、象形や指事を組み合わせたもの。

〔形声〕「サンズイ十可」の河のように、一方に音を発するもの。

〔転注〕命令の「令」が、命令を下す人である県令（知事）のように転用されるもの。

〔仮借〕肉を盛る器の豆を「まめ」の意に用いるように、同音の文字を当てて転用されるもの。

ということですが、転注と仮借については、複雑で私自身よく理解出来ていません。学者によっては漢字の使い方に関係するため、造字法ではないと指摘される学者もいらっしゃいます。

このように、意味を持つているというのが大きな特徴の一つです。

（つづく）